

アウグスティヌスの神認識における視覚表現について

川崎千里

序

アウグスティヌスは神認識を感覚認識とは区別しながらも「神を見る」(videre Deum)と表す¹⁾。「神を見る」ことは究極の目的であり、至福の生 (beata vita) とも言われる。その後のキリスト教神学の基本線を定めたとも言えるこの表現には²⁾、二つの源泉がある。一つは、プラトニズムの神秘主義的伝統であり、肉体の汚れから浄化された魂が可変的世界から上昇し真実を見るというものである³⁾。もう一つは、「私たちはいま鏡を通して謎のうちに見っていますが、かの時には顔と顔を合わせて見るでしょう」(『コリント人への手紙一』13.12)などの聖書の言葉に見られる終末思想である⁴⁾。そして、「神を見る」という表現は、主にこれら二つの伝統との比較・連関によって論じられてきた。つまり、それは、アウグスティヌスの回心におけるプラトニズムとパウロの影響をいかに評価するかをめぐる問題である。しかし、本稿では、単に神を知るという抽象的な表現ではなく、神を「見る」と言われている点に注目したい。アウグスティヌスは古代ギリシアの自然学を援用しながら感覚認識の一つとして視覚を論じ⁵⁾、神認識の構造を説明する道具立てとして視覚を用いる。また、日常の視覚経験に関する考察も行っており、「神を見る」という表現には二つの伝統の影響の他に、アウグスティヌス自身の視覚理解が反映されている。そこで、さまざまな著作にあらわれる視覚に関する記述を一貫した見通しの下に再構成することによって、この視覚表現が表す神認識の特徴を考える。アウグスティヌスは「見る」ことに能動的な側面と受動的な側面を見出し、その二つを人間の本質とみなす。すなわち、視覚経験の能動的側面は至福を志向する意志を、受動的側面は可感的事物に固執してしまう神探求における否定的要素を表すが、これら相反する二面性を持つ人間の神探

求の基盤は、実は神によってひらかれ、神においてその発動根拠を持つのである。

1 メタファーとしての視覚

まず、視覚の特徴を取り出すために、視覚が神認識を説明するメタファーとして使われている初期作品『ソリロキア』について考察する。比喩である以上、比喩表現とそれによって表される事柄の間には何らかの類似が前提とされているはずである。「神を理解する (intellegere)」ことは「神を見る (videre)」ことであると言われて⁶⁾。「理解する」ことには「精神 (mens)」を持ち、「理性 (ratio)」をはたらかせるという二つの段階を経て到達する。この神認識の構造が「既にうまい具合に用いることのできる目を持つこと (oculos habere, quibus iam bene uti possit)」、視線を向けること (aspicere) の二つの条件を満たすことによって「神を見る」ことができる」と説明される。ここで注目したいのは、「視線を向けること」である。「aspicere」には「～へ向かって」という方向性を表わす接頭辞‘ad’が付いている。方向性が伴わなければ目を持っていても見ることは成立しないであろう。この方向性は志向性⁷⁾とも言い換えられるが、視覚経験の成立にとって、感覚器官である目を持つという、いわば自然条件のみならず、その必須の契機として方向性、あるいは志向性を見出したことがアウグスティヌスの視覚論に顕著な特徴である。また、「[ものが] 見られうるためには太陽によって照らされなければならない。しかるに照らすものは神ご自身なのである」⁸⁾。従って、神を見るために視線を向けるとは、光によって照らされた可視的事物に向けられていた視線を光源へと「向けかえる (convertere)」ことなのである。

神へと「視線を向ける」には二つの契機が必要とされる。一つは、神を見るための第一段階である目、すなわち精神にかかわる。『ソリロキア』は「わたし」と「理性」の対話形式で描かれ、「理性」によって「わたし」が神を見ることのできる目を持っているかどうか吟味される。そこで明らかになるのは、神を見ることのできる目とは、外的事物に対する欲求の抑制⁹⁾ができていない精神のことなのである。その一方で、アウグスティヌスは「神と魂が知りたい (Deum et animam scire cupio)」¹⁰⁾と言い、神探求を欲求の文脈で語る。つまり、神への欲求とは、外的事物への欲求の抑制ができていない精神を発動条件の一つとして要請する。だが、外的事物への欲求の抑制だけでは神へと完全に視線を向けかえることはできず、神への欲求とも言えない前段階の

ものなのである。

しかし、その視線 (aspectus) はすでに健全な目でさえも光のほうへと向けかえる (convertere) ことはできないのだ。もし、あの三つのものが絶えず付き添っていないのならば、すなわち、視線の向けかえられるべき対象が、それを見る時に人を至福にすると信じさせる信仰 (fides)、ちゃんと視線を向けているならば、将来見るであろうことを期待させる希望 (spes)、そして、それを見ることと享受することを熱望する愛 (caritas) である。(Soliloquia, I.6.13.)

信・望・愛がまだ見えざるものへの到達の可能性をひらく。従って、神への欲求とは、理性の指導によって神を見るための目を獲得し、信・望・愛がひらく到達の可能性のうちに不可視なる神に向けられた視線なのである。そして、以上のような神探求における欲求の果たす役割を重視するという基本線は、成熟期から晩年にわたり執筆された『三位一体論』においても貫かれている。ただし、『ソリロキア』においては消極的な意味しか付与されていなかった外的事物に対する欲求は、『三位一体論』第十一巻においては神認識の道程に積極的に位置づけ直されることになる¹¹⁾。

2 ものを見ること

『三位一体論』第十一巻において議論されるのは、日常的・具体的な場面における「見る」ことについてである。

本巻は、神の三位一体を正当に理解するために、人間精神のうちに三位一体の痕跡を探求するという第八巻以降の手法に沿って、視覚における三一性の存立とその変容とが論じられている。こうした三一性は、実際にもものを見ている知覚の場面と、想起・想像といった思惟の場面の二つにおいて見出されている。前者における三一性は、「もの (res)」、「視像 (visio)」、「心の志向 (animi intentio)」である¹²⁾。後者は、「記憶 (memoria)」、「内的な視像 (interna visio)」、「意志 (voluntas)」である¹³⁾。三つの構成要素はその本性において区別され、三一性を成立させる要である第三の要素は魂に属すると強調されている¹⁴⁾。また、第三の要素はさまざまに言い換えられているが¹⁵⁾、目的に応じた三つの機能として考えられている¹⁶⁾。第一に、「意志はものと視像とを結合する力 (vis copulandi rem et visionem) をもつから、形成されるべき感覚を見られるものに向け、形成されたものを見られるものにおいて保持する」¹⁷⁾という、視像を現前化させる知覚における志向性である。この場合、目的となってい

るのは視像である。第二に、意志は有意的な行為における志向性を表す。行為の目的、意図と言い換えられるものである。例えば、傷があったことを証明するために癩痕を見ようと欲する場合がそうである¹⁸⁾。また、行為における志向性は自らの目的成就のために知覚における志向性を関係づける (referre)。つまり、関連づけるとは傷の証明という目的を持つ意志が自らの目的を享受 (frui) するために癩痕の視像を使用 (uti) することである。しかし、ある時には享受の対象であった目的が、ある場合には他のものに関係づけられ、使用される可能性もある。従って、行為は二種類の意志の享受と使用の複雑な連鎖によって成り立っていると考えられるが、すべての意志の連鎖は第三の意志、すなわち至福を目的とする意志¹⁹⁾に関係づけられるべきだとされる。

私たちがそれによって幸福に生き (beate vivere)、また他のものに関係づけるのではなく (non referre ad aliud)、愛するものをそれ自身をとおして満ち足らせるあの生に到達することを欲するあの意志の目的に関係づけられるのである。

(*De trinitate.*, XI.6.10.)

知覚による視像や身体運動を介して達成される個別的な行為の目的とは、至福の生に関係づけられるものであって、究極の目的とはなりえない。しかしながら、その一方で、至福を目指す意志によって個別的な行為が至福へと連鎖させられてゆくその限りにおいて、この世の生が至福の生に対して決して無意味なものではないのである。

また、本巻において、意志は「私」を支配する強い力として描かれている。例えば、見ることを欲しないものに対しては目をそらす、手紙などを読んでいても意志が他のことに向けられているならば何を読んだのか分からないなど、意志は身体運動や思惟を支配する。従って、あらゆる行為や思惟は意志そのものにかかっているとよい。従って、意志とは自発的に、能動的に外部のものにはたらきかけ、至福へと関係づける強い志向性である。

だが、このような能動的側面とは逆に、アウグスティヌスは、ものを見る場合、このように見たいものだけを選んで見ているわけではなく、諸事物のほうから目にはたらきかけてくるという、「見る」ことを受動的側面についても言及している。さらに、すべての人が幸福を願っているにもかかわらず、さまざまな幸福観がある²⁰⁾。これらは、アウグスティヌスが「神を見る」という真の至福への意志を単純なしかたで神探求の根幹に据えているわけではないことを示していよう。ならば、いかにして人は自

らの意志を真の至福へと向けることができるのか、神へと視線を向けかえることができるのか、それを問わなければなるまい。そこで、まずは「見る」ことにおける受動的側面についてアウグスティヌスが述べている『告白』第十巻の考察からはじめたい。

3 盲目性のパラドクス

「見る」ことにおける受動的側面とは、可視的事物からの「誘惑」として次のように語られている。

これらのものは目覚めているかぎり終日私にふれていて (*tangunt me vigilantem totis diebus*)、それから解放されて休息を与えられることはありません。(中略) じっさい、もろもろの女王である光は、われわれの見るすべてのものをうるおし、日中どこにいても、さまざまな形でわきをとおりすぎ、私が他のことをして注意を向けない (*non advertere*) 場合にも、さそいをかけてきます。しかもきわめて巧妙にとりいりますから、突然奪われる場合には熱心に追いかつめ、長いあいだ光がないとものがなしい気持ちになるのです。(Confessiones, X.34.51)

『三位一体論』において視像形成には知覚の志向性がはたらくとされ、その志向性は行為における目的という文脈のうちに位置づけられていた。だが、ここで述べられているのは、ある目的成就のために、ものを見ることの欲求が起こるのではなく、ものの側から見ることの欲求が引き出されることなのである。ものから引き出された欲求は、ものを見ることを目的として視像を形成する。しかも、そこで形成された視像は、はじめから他の目的に関係づけられていない以上、ただ見るだけに終わってしまう自己完結的性格を持つ。アウグスティヌスは、ただ知りたい、ただ見たいという「好奇心 (*curiositas*)」を真の知識欲から区別するが²¹⁾、その理由は他の目的をもった意志、すなわち至福の生を志向する意志に関係づけられることがないからであり、同時にそれは至福を目指す意志の発動を阻むものとして作用するからなのである。

また、アウグスティヌスはこのような可視的事物からの誘惑に陥った状態にある者を「盲人 (*caecus*)」と呼び、その一方で、感覚器官である目が見えないという意味での盲人として、トビト(『トビト記』4)、イサク(『創世記』27.28)、ヤコブ(『創世記』48)を挙げている。これら二種類の盲人たちはそれぞれが見る光によって区別されており、前者が見るのは「物的な光」(*lux corporalis*)であり、後者が見るの

は「これこそは光である」(ipsa est lux)と言われる光である。そして、このような光は「内なる目」(interior oculus)で見ることができる。

もう一つの目、内なる目、これが必要なのだ。すなわち、トビトは肉の目において見えなくなって息子に生きるための指示を与えたが、その時のトビアも決して目を持っていなかったわけではない。トビアは父の手を取って歩ませた。しかしトビトは息子に、義の道を歩むように諭したのである。トビアの目は目に見える目だったが、トビトの目は理解される目だった。そして生きるための指示を与える人の目の方が、手を取る人の目よりも優れているのだ。イエスがフィリポに向かって「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか」と言われたとき求められていたのはこのような目なのだ。この目は知性の中にある。この目は精神の中にある。(In *Johannis Evangelium tractatus*, 13.3.)

では、感覚器官では見ることでできる者が盲人と呼ばれ、感覚器官では見えない者が光を見るという、この二つが並置されていることの意味は何であろうか。とりわけ、実際に目に障害を持つ盲人が光を見た者として選ばれている点に注目したい²²⁾。また、これら二種類の盲人が語られるこの箇所において特徴的なのは、「外」と「内」という場所表現が同時に用いられていることである。すなわち、ヤコブについては、「その父親が外から (foris) なおそうとしたしかたではなく、自分自身の心の内で (intus) 判断したしかたで手を置いたとき、その光を見た」²³⁾、誘惑に陥った者については、「外に (foris) 自分たちのつくるものを追いもとめながら、内に (intus) 自分たちをつくりたもうた方をおきざりにする」²⁴⁾。「外」と「内」との対比的な使われ方と、光を見た者がいずれも盲人であったことを考えあわせるならば、光を「内なる目」で見るとは、外に向けられたまなざしが遮断されることによって生起する事態であり、それは同時に視線がもはや外に向けられることがない状態にあること、すなわち盲目になるということである。従って、神を見るために神へと視線を向けるとは、盲目にならねばならず、それはまた、外へ向けられた視線を自己の内へと向けなおすことなのである。では、アウグスティヌスはどのようにして盲目になり、神へと向きかえたのか。それは『告白』第四巻における友の死をめぐる悲しみの記述において見出すことができる。

4 涙の記憶

その友とは、当時、アウグスティヌスと同じくマニ教に傾倒していた人であり、その友人との関係は、『告白』を執筆しているアウグスティヌスから見れば、「死すべきものを死なないものであるかのように愛していた」²⁵⁾虚構の友情ではあったが、「当時の私の生活のあらゆる甘美なことにまさって甘美であった (suavi mihi super omnes suavitates illius vitae meae)」²⁶⁾。だが、その友が突然、死んでしまうのである。

そして、どうでしょう、復讐の神であると同時に、あわれみの泉でもある神よ、あなたは実に不思議な仕方で私たちをあなた自身へと向けかえます (convertis nos ad te)。すなわち、あなたは、その時、逃げてゆく私たちの背中に追いせまりながら、友人をこの世から取り去ってしまったのです (abstulisti)。(*Confessiones*, IV.4.7.)

友の死によってアウグスティヌスは甘美な友情から一転して悲しみへと落ち込んでゆくのだが、この経験が「あなたが私たちをあなたへと向けかえた」、「あなたが取り去った」と言われている点に注目したい。アウグスティヌスの回想によれば、この出来事を起こした主体は神とされている。そして、悲しみが深まってゆくと同時にアウグスティヌスの視界にも変化があらわれる。

この悲しみ (dolor)²⁷⁾によって、私の心 (cor meum) はすっかり暗くなり、私がまなざしを向けるものはすべて死となってしまった (quidquid aspiciebam mors erat)。私にとって故郷は責め苦となり、父の家は訳のわからぬ不吉なものとなり、友人と共有していたすべてのものは、彼のなき今、おそろしい苦痛にかわった。私の目 (oculi mei) はいたるところに彼をさがしたが (expetere)、どこにも見あたらない。何もかもにくらしくなった。(*Ibid.*, IV.4.9.)

まず、アウグスティヌスは甘美な友情にあった時とは全く異質の世界を見る。しかし、故郷や父の家が変わったのではない。目に映る故郷や父の家が変わったのである。そして、その変化を起こしたのは悲しみである²⁸⁾。だが、それでも視線はまだ外へと向けられている (expetere)。この悲しみはアウグスティヌスにさらなる変化をもたらす。

この魅惑の森の中にも、遊びや歌の中にも、甘美にかおる場所の中にも、豪華な宴会の中にも、寝床の快樂の中にも、そして、ついには、書物や詩歌の中にも、

魂は安らぎを見出しませんでした。すべてのものが、光そのもの (lux ipsa) までもがおぞましくなりました。友人でなかったものは何であれ、嘆きと涙をのぞいて、いやになり、我慢できなくなりました。ただ、嘆きと涙の中にだけいくらかの安らぎがありました。(Ibid., IV.7.12.)

ここでは、ものが見えるために必要不可欠な「光そのもの」までもが拒絶されている。これは見ることの徹底した拒否の表明ではあるまいか。アウグスティヌスは「惨めな者たちにとって泣くこと (fletus) がなぜ甘美であるのか」²⁹⁾と問うが、明確な答えはない。しかし、外界へまなざしを送ることの拒否はいかに実行されるのか。目を閉じるか、泣くことによってなのではないか。涙によって目を覆ってしまうこと、それによって外界を拒絶する。何を見るにつけ友を探してしまうという時に、涙が視線を曇らせることは唯一甘美であったのではないか。

だが、「泣く」ことと「涙」はアウグスティヌスの悲しみを表現する文学的修辞や悲しみに随伴する生理的現象にとどまるものではない。ここでアウグスティヌスが言及する「泣く」ことや「涙」の本質的な機能とは、まさに外界へのまなざしによって普段はなかば自明なものとして忘れ去られている自己の内面を浮かび上がらせることにこそあるのだ³⁰⁾。

そして私は、いぜんとして自分にとって、そこにいることもできず、そこからのがれるすべもない不幸な場所でした。じっさい、私の心は自分の心からどこへ逃げてゆくことができたでしょうか (cor meum fugeret a corde meo)。(Ibid.)

アウグスティヌスは神によって神に向けられ、涙によって盲目となった時に「私の心 (cor meum)」を見たのである。‘cor’という語は心臓を意味する語であるが、身体器官としての心臓に関する観念が発展させられて、「近寄りがたい」、「不可知なもの」、「秘密のもの」という意味をもあわせもつ³¹⁾。従って、アウグスティヌスが見たのは、普段は自分にも隠された、自分ですら見通すことのできない自分自身の心と言えよう。だが、アウグスティヌスにとって「心」の最も重要な意味とは、「あなたは私の心を御言をもって貫かれましたから、あなたを愛してしまいました (percussisti cor meum verbo tuo et amavi)」³²⁾と言われるように、神からのほたらきかけが直接触れる魂の場なのである。また、目が見えない時に人はどうするだろうか。手を広げるか、導き手の声を求めて耳を澄ますのではないのか。アウグスティヌスは自分の心を見た時、神からの語りかけを「聞く」者として神へと向きかえったのである。

惨めな者たちにとって泣くことがなぜ甘美であるのか。そのわけをあなたから聞くことができるでしょうか。また語りたもうように、心の耳 (cordis auris) をあなたの口もとにかたむけることができるでしょうか。(Ibid., IV.5.10.)

この経験はアウグスティヌスの回心を決定づけるものではなかったが、己の盲目を癒す神への「信」³³⁾に至る一つの出来事であった。

結 語

アウグスティヌスの神認識とは、『ソリロキア』や『三位一体論』における神への欲求、至福への意志を原動力とするものである。しかしながら、その一方で人は至福ならざるものを至福であると思ひこみ、それに固執する傾向にある。従って、神への欲求、あるいは至福への意志は安易に定立されるものではなく、『告白』第十巻において明らかにされたように、自らの視線を閉ざし、盲目になること、自己自身へと視線を向けかえることが必要とされる。それは自己自身の心 (cor) と向き合うことであり、そこにおいて導き手である神への信が生まれる。信において、いまだ見えざる神への欲求、不在なる至福へと意志が十全に発揮されるのである。だが、『告白』第四巻のアウグスティヌス自身の経験にもあるように、盲目になること、さらには自己自身に向き合うことは、「神によって神に向けられた」という神の恵みによって成立するものなのである。

注

- 1) *Soliloquia*, I.6.12; *De doctrina christiana*, II.7.11; *De trinitate*, XV.6.10 (videre trinitates) など。
- 2) Cf. Thomas Aquinas, *S.T.*, I, q. 12. 神認識が「神の本質を見ること」(Dei essentiam videre) と言われている。
- 3) *Respublica*, 514a-518b; *Symposium*, 210a-211c; *Phaedo*, 66e-67b. アウグスティヌスの神秘体験 (*Confessiones*, VII.10.16; IX.10.24) の描写、及び観想に至る七段階 (*De quantitate animae*, 33.70-76) には *Enneades*, V.1; IV.7.1-11 の影響が見られる。cf. *Collectanea Augustiniana, Augustine: Mystic and Mystagogue*, ed. by Frederick Van Fleteren, Joseph C. Schnaubelt, OSA, Joseph Reino, Peter Lang Publishing, 1994.
- 4) 『三位一体論』において繰り返し引用されている。IX.1.1; XII.14.22 など。
- 5) *De quant. an.*, 23.43-44; *De musica*, VI.5.12; *De genesi ad litteram*, IV.34.54. cf. Marcia L. Colish, *The Stoic Tradition from Antiquity to the Early Middle Ages: II*,

E.J. Brill, 1990, pp.169-181.

- 6) *Sol.*, I.6.12.
- 7) 視覚における志向性については本稿第2節で論じる。
- 8) *Sol.*, I.6.12.
- 9) *Ibid.*, I.10.17.「欲求の抑制」と総称したのは、「欲求することから離れる (*cupere destiti*)」,「心を動かされることはない (*nihil me conmovent*)」,「一つの心の動揺もなしに (*sine ulla permotione animi*)」といった諸表現である。
- 10) *Ibid.*, I.2.7. この言葉は「理性」によって「君は神と魂を知ること以外に何かを愛しているのか (*amare*)」(9.16),「君は何を見ようと欲しているのか (*velle videre*)」(10.17) と言い換えられている。従って、神への欲求とは、「神を愛すること」,「神を見ることを欲すること」を意味する。
- 11) 本稿においては視覚の有する特徴を論軸にして展開するため、アウグスティヌスの思索の推移・発展については別稿にて考えたい。
- 12) *De trin.*, XI.2.2.
- 13) *Ibid.*, XI.3.6.
- 14) *Ibid.*, XI.2.2 ; 2.5 ; 5.9.
- 15) 「見ることの欲求 (*videndi appetitus*)」(2.2),「心の意志 (*voluntas animi*)」(2.5),「意志の志向 (*intentio voluntatis*)」(4.7)。
- 16) 門脇俊介『理由の空間の現象学』創文社, 2002年, pp.177-194を参照。『三位一体論』第十一巻をとりあげ、アウグスティヌスの志向性概念を「知覚の目的論」,「行為の目的論」の二つの観点から論じている。
- 17) *De trin.*, XI.2.5.
- 18) *Ibid.*, XI.6.10.
- 19) 「人間の意志そのもの (*voluntas ipsa hominis*)」と言われる (*Ibid.*)。
- 20) *Conf.*, X.21.31 ; *De trin.*, XIII.4.7.
- 21) *Conf.*, X.35.55 ; *De trin.*, X.1.3. 両著作における「好奇心」の思想的背景に関しては、荻野弘之「アウグスティヌスにおける自己知の両義性——『三位一体論』第十巻を中心に——」『哲学紀要』第20号, 上智大学, 1994年, p.45, 註13を参照。
- 22) Cf. アウグスティヌスは「神を見た者」として、「アブラハム」(『創世記』18.1), 「イザヤ」(『イザヤ書』6.1), 「ステファノ」(『使徒言行録』7.55) を挙げている (*Epistula CXLVII, De videndo Deo*, 6.18)。
- 23) *Conf.*, X.34.51.
- 24) *Ibid.*, X.34.53.
- 25) *Ibid.*, IV.8.13.
- 26) *Ibid.*, IV.4.7.
- 27) この悲しみは『告白』第三巻の悲劇の愛好とは別種のものであると思われる。悲劇

における悲しみとは、「私がそれによって自分のうちに深くはいつてゆく悲しみではない (non quibus altius penetrarer) (2.4) と言われているのに対して、本巻では「その悲しみは心の最も奥までしみこんだ (in intima dolor ille penetraverat) (8.13) と言われているからである。

- 28) ここに心身相関的な (psychosomatic) 人間本性の把握が見られる。この箇所に関連したものではないが、アウグスティヌスの心身相関的見方については、Margaret R. Miles, *Desire and Delight: A New Reading of Augustine's Confessions*, Crossroad, 1992, p.47f.
- 29) *Conf.*, IV.5.10. なお、荒井洋一は友と味わっていた「甘美さ (dulcis, suavis)」と友の死後にアウグスティヌスが味わう「苦さ (amaritudo)」の対比表現に着目し、この表現が「甘美さ」から「苦さ」、そして「苦さ」から「神における甘美さ」への「転回 (conversio)」を表すと捉える。「泣くことはなぜ甘美であるのか」『アウグスティヌスの探求構造』創文社、1997年、pp.153-171を参照。
- 30) 「涙」については、Jacques Derrida, *Mémoires d'aveugle-L'autoportrait et autres ruines*, Paris, 1990, p.125 に大いに教えられた。「涙が目に来るものであり (vient aux yeux), そしてそのとき視界を覆うものであるならば、涙こそがおそらくこの経験の流れのさなかで、この水流のなかで、目というもののある本質を、いずれにせよ人間の目の聖なる寓意の人間——神学的空間において理解された目の本質を啓示するのである。根底においては、目の根底では、目の用途は見ることではなく泣くことだということになる。眼差しがそれを覆蔽している忘却の外へと涙が逆らせるもの、それこそはアレーティアに、このようにして涙が至上の使命を啓示する目の真理に他ならない」(鶴飼哲訳『盲者の記憶——自画像およびその他の廃墟』みすず書房、1998年、p.154)。
- 31) アウグスティヌスは“cor”以外にも「骨 (os)」などの身体部位を用いて特定の心的状況を表現している (*Conf.*, VIII.1.1)。こうした表現は、ヘブライ的思考の特徴である。cf. Hans Walter Wolff, *Anthropology of the Old Testament*, Fortress Press, 1974, p.43.『告白』第七巻後半及び第八巻冒頭を中心に、こうした表現に関する詳細な研究として、加藤信朗「Cor, praecordia, viscera —— 聖アウグスティヌスの『告白録』(Confessiones) における psychologia 又は anthropologia に関する若干の考察」『中世思想研究』IX, 1967年、pp.54-80を参照。
- 32) *Conf.*, X.6.8.
- 33) 「それゆえ信仰は聞くことから始まり、聞くことはキリストの言葉によって始まる」。『ローマの信徒への手紙』10.17.